

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第155冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2013年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ながおかきゅうあとだ いよんひゃくはち じゅうくじ・みなみ かきうちいせき 長岡宮跡第489次・ 南垣内遺跡	むこうしてらどちよ うみなみかきうち 向日市寺戸町南垣 内	26208	24 61	34° 57' 05"	135° 41' 57"	20120517 ～ 20120630	80	道路建設
やまざきつあとだ いじゅうなな・じゅう はち 山崎津跡第17・18 次	おとくにぐんおおや まざきちょうおおや まざき 乙訓郡大山崎町大 山崎	26303	19	34° 53' 30"	135° 41' 01"	20101214 ～ 20110218 20110426 ～ 20110615 20111024 ～ 20111222	800 1,000	道路建設
きづがわかしょうい せきだいにじゅうに じ 木津川河床遺跡 第22次	やわたしやわた 八幡市八幡	26210	4	34° 53' 46"	135° 42' 02"	20110425 ～ 20110614 20120110 ～ 20120210 20120423 ～ 20121116	700 6,000	河川改修

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡宮跡第489次・南垣内遺跡	宮都集落	中世	柱穴・土坑・溝	土師器・須恵器・黒色土器・無釉陶器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器	
山崎津跡第17・18次	港	奈良～平安 中世 近世	流路	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・木製品・瓦・獣骨・人骨	陰刻文字瓦・地震痕跡
木津川河床遺跡第22次	集落	近代	水制・護岸	土器・陶磁器・瓦・土製品	デ・レイケによる治水工事

所収遺跡名	要 約
長岡宮跡第489次・南垣内遺跡	<p>調査地は、段丘低位面の谷筋に位置する。上層では中世以降の溝や土坑・柱穴を検出し、棧瓦を含む多くの中世・長岡京期・古墳時代の遺物が出土した。S D01-1・2は、西隣で調査された近世流路の延長部分と考えられ江戸時代末期の地籍図に記載されている水路の可能性のある。下層で検出したS D12は谷底を流れる流路であり、宮跡第473次調査で検出されたS D07の延長と考えられる。</p> <p>調査地は寺戸城の北辺に当たるが、同時期の遺構は確認できなかった。また、古墳時代・長岡京期についても遺物は出土しているが、遺構は確認できなかった。調査地が谷部に位置することや周辺の調査成果から、遺構は調査地の南側に存在したと想定され、後世の整地等により遺物が混入したものと考えられる。</p>
山崎津跡第17・18次	<p>調査地は、桂川と大山崎の市街地が最も近接する地点である。第17・18次調査では、遺構は検出していないが、包含層中から奈良～平安時代および中世の土器や瓦のほか木製品や人骨および獣骨など多量の遺物が出土した。調査地は川の水際に近く、滞水した状況が伺えることから、一帯は人為的に水流の調整が行われた区域とみることができ、周辺に港(津)に関わる施設があった可能性が高い。出土した多量の土器群はこうした港湾周辺の施設および居住区から廃棄されたものとみられ、調査区の周辺は、古代から中世における山崎津の一角を占める地点であったと推定される。また、陰刻文字瓦は、行基が建立したとされる山崎院に使用されたと考えられるもので、大山崎町内では多量に出土している。山崎津跡でははじめての出土例であり、現桂川の水際に近接する地点までその分布が広がることを確認できた。</p> <p>その他、1596年の慶長・伏見大地震に起因すると考えられる曲隆や噴砂などの地震痕跡も検出した。</p> <p>また、第18次調査では、江戸時代後期～近代まで続く幅約7～8mの大規模な流路を検出した。流路は、護岸などにより人為的に管理されており、明治時代の仮製図にみえる、永荒沼から派生する河川の一つと考えられる。近世の山崎津の周辺には、こうした川船の漕上も可能な大規模な流路が複数存在し、港湾機能を果たしていたものとみられる。</p>
木津川河床遺跡第22次	<p>桂川の河川敷において調査を実施し、川に突出するT字の貼り石状遺構を12基検出した。「新宇治川桂川木津川合流口平面図」と照らし合わせた結果、この貼り石状遺構は、明治初期のオランダ人技師デ・レイケらによる淀川河川改修工事に伴う水制・護岸であることが判明した。</p> <p>また、その構造については、「粗梁沈床工」等当時のオランダ人技術者がもたらした近代的な西欧土木技術が用いられていることを明らかにすることができた。</p> <p>今回の調査成果は、淀川の治水および土木技術の歴史を解明する上で貴重なものであることから、遺構については現地保存されることとなった。</p>